

があった。その後バレンバンへ戻る。その間、現地軍が兵器が欲しく日本軍の連絡車を襲ったというので出動し、連絡兵二人かを救出したことがある。

バレンバンで初めて英印軍に武装解除された。昭和二十一年七月上旬頃か、英軍将校が面接する。カードを持って、何処から来たかと、華僑の通訳を通じ戦犯を調べている。そこで戦犯を発見するのだ。我々はバレンバンで船を待っていたが、食料は煎餅にしたような米飯だった。船はようやく出航し、大竹に着いたのは八月だった。

大竹から列車の中で、一般の人は米の飯、握り飯を食べていた。我々復員兵は「アー握り飯だ」といったので、その人は握り飯を分けてくれた。スマトラで終戦になってから白米の飯は食べていない。握り飯は一年振りだった。南方の抑留生活については余り語られていないが、半ば報復的な仕打、兵糧攻めに遭った抑留者も多い、ある所で、ある人は人道的に、ある所で、ある人は殺意さえ含んだと思う仕打に泣いた。また冤罪のため処刑された者もいた。

私は岩手県の宮古へ直接帰ったが、店は配給制度でやめていたが幸いに家族に変わりはなかった。帰ってからマラリアが出て半年ぐらい悪寒とふるえで、布団を何枚掛けても無駄だった。寒さが終われば四十度を越す高熱で苦しんだものだが、幸いに生を得て今日生きています。マニラで別れて戦没した同級生のことを思い出す。

## ラバウル戦線記録

鹿児島県 外園 肇

### 一、南太平洋波高し

昭和十八年七月十八日、応召、鹿児島第十八部隊通信隊西村隊へ入隊、第八方面軍、暁第七〇四八部隊陸上勤務第一〇六中隊補充要員として召集を受け、当初から前線行きと決まっていた。

第十八部隊の三か月間、初年兵教育（戦時訓練）の毎日であり、我々の行く先である南太平洋の戦況、同

方面の日本軍の苦戦時を部隊の先任古兵や上等兵等から、種々悪い情報のみ聞かされ、快い気持ちではなかった。(内地を離れたら目的地へ着くまでに、途中撃沈されるか、もし、何とか目的地へ上陸できても、玉砕か、既に覚悟は決めて行かねばならぬ)と、心中厳しい状況を考えていた。そして、その反面(何と我々は貧乏くじをひいたものかと腹立たしくなり、せっかくこの世に生れた命だ、大死にだけはしたくない)と強く心に誓うことだった。

同年十月五日、都城部隊へ我等補充要員(野戦上番)は全部移動し、ここで宮崎県と熊本県の、我々と同様の補充兵と一緒に、編成を組み、輸送計画により門司港へ鉄道輸送される。

十月十日深夜、門司港発、一万トン級「摩耶山丸」(鋼鉄船でまだ新しい優秀船)に乗船する。夜は明けだが船はまだ港に泊まっていた。ここは大分県佐伯湾。ここから南方へ向け船団を組み出港して、豊後水道を南下する。

十月十一日、船団は太平洋に出た。はるか南の方向

を見れば、島影一つない太平洋の水平線のみ、日本の島々はだんだん小さくなって遠ざかる。はるかに母国を眺めながら(再びこの母国へ相まみえることができらるであろうか)と、内心憂愁にくれながら、無事で母国の土を再度踏むことができるように、心中ひそかに神仏に念じるのだった。

十月十八日、パラオ島へ無事着いた。目の覚めるような新鮮な島の緑。内地の緑とは全然違うみずみずしい色。また、深く澄み切ったきれいな海だ。いろんな美しい魚が泳いでいる。全く夢の国に来たような感じだ。上陸してその太陽の紫外線の強いこと、日本の真夏といえどもこれは段違いの赤道直下だ。昼の十一時過ぎだから立っている自分の影がない。

完全武装の装備で駐屯地まで行軍。何キロ歩いたか、途中中小休止をとりながらかなり歩いて、ようやく目的地「愛来村」へ到着、一同川からずぶぬれで上がったような汗だ。

丘陵地帯の草原へ各隊幕舎を張り、しばらくここで次の移動まで駐屯である。結局ここで一か月位過ごす。

この間、南洋庁のあるコロールの町も近く、自分は本部指揮班の公用で、町まで出掛けることが多く、冷たい飲物や不足している日用品等の買い付けや、休日には戦友と出掛けることもあり、軍隊生活の全期間を通して、最も楽しいパラオの日々であった。

十一月二十五日、いよいよ第一線ラバウル方面に向かい出港の命令が下り、直ちに出發準備、四千トンないし五千トン級の船五隻、我々の船は四番船で、四千トン級の「北光丸」という船だった。甲板やあちこちに赤錆があり、何だかボロ船の感じだ。一番船よりそれぞれ間隔をおいて、五番船までの輸送船団を、海軍の駆潜艇が両側から一隻ずつ護衛艦として進行。直進を避け、大回り小回りノロノロ運転で水路変更を繰り返し行い、敵の攻撃を避け、細心の注意を払いつつ船団は進む。前後左右に敵の攻撃に備え、監視兵を各隊より交替で出し、監視を厳重にする。なお、監視兵以外は上甲板に出ることは、兵員輸送の極秘を期するため禁じられていた。

昼夜兼行緊張のうちに航海は続き、パラオ出港後四

日目の朝を迎え、このまま航海の無事を念じるのであった。目的地ラバウルに何時着くのか、全く遠く感じられる。たまたま、監視で上甲板が上がってどちらを見ても、島影ひとつ見えず水平線のみで、本当に心細い限りであった。

朝点呼の時、隊長から

「本船団は本日十時に、赤道通過の予定である。それで、船の方で赤道祭をやり、御馳走してくれるそうだから、その為に手伝いとして各隊から使役を出すように」

と達示があつて間もなく「ビービービー」と危険信号の連続警笛。これは敵来襲だと、一同飛び起きて大急ぎで甲板に上がった時、五番船の「由利丸」（五千トン級）が、船体の真中程の船腹に、魚雷（魚形水雷）攻撃を受けて大爆発、「ドドン」という大音響と共に、船体は真つ二つに折れ、破片が空高く飛び散り、折れた船体が沈んで、海上から船影が見えなくなってしまうまでは何分もかからなかった。「轟沈」だった。「由利丸」はやられたのだ。一同驚きながら異口同音

に

「由利丸がやられた」

と叫んでいる。ちょうどその時、我等の「北光丸」の船尾の方に「ド、ドスン」と大きな激しい衝撃音、途端に、一人残らず甲板に投げ付けられてしまった。

「船尾が、スクリューがやられた」

船員が大声で叫びながら駆けていく。兵達の顔色は皆蒼白だ。私はすぐさま船倉に取って返し、上着と雜のうを取り甲板へ駆け上がった。隊長は取り乱している兵達に「慌てるな、慌てるな」と繰り返して、必死に叫ぶ。

「救命筏、木材等の浮かぶ物を先に投げ込んで、海に飛び込め」

と命令する。同時に指揮班の兵隊十三名集合だ。私は真っ先に駆け付けた間もなく熊本出身の水流（ツル）がくる。隊長が

「御前達、ご苦労だが、公用行李を病人の乗っているボートに乗せよ。」

の命令。公用行李はパラオを出る時、自分が荷作りの

関係上、最も大事なものは、四号と五号行李だと以前から知っていた。船倉に走り降りながら、

「水流、お前四号行李を持って、俺が五号行李を持つから」

と言って、船倉からどうして担いで上がったか分からない程急いだ（五十年近くたった今日でも、頭のどこかにその時の状況ははっきりと記憶に残っている。船倉の所まで、海水の白い泡が音を立てて入りつつあったことも）。

行李を無事ボートの係の船員に渡して、海に飛び込もうと船首の方へ行きかけた時、船員が

「ここから、早く」

と言って、ロープを下に降ろすところだった。

「これは良かった。助かった」

と言って船員の後を追いかけて、ロープの下がった途中から海水に飛び込んだ。船員と私はほとんど同時に、一緒に泳ぎだした。

隊長はどこへ、水流は、と見回してみたがそこには誰もいない。

船は、と振り返って見ると、船尾の方からだんだん沈んでゆく。その沈んでゆく流れに巻き込まれたら最後だ。はるか沖の彼方に救命筏や木材等にすがった戦友があちこちに何名かずつ寄り添って、お互い生きようと必死に頑張っているのが見える。

船が沈む時出来る大きな渦に、巻き込まれぬように必死に泳いだ。(船と心中はできぬ) 泳ぎは得意な方だったから、何とかその危険な圏内から逃れるべく、懸命に泳ぐのであるが、気ばかり焦ってなかなか前に進まない。

泳ぎながらも、気になる船はと見ると、既に船体は半分位沈んでいる。気が付くと海水はその方向へ向かってどんどん吸い込まれるように流れているのだ。道理で進まない筈だ。これは一大事と直感。死に物狂いになって泳ぐ。やっとその危険区域を逃れたと思つた時、

「助けてくれ」

と言いながら、私の雑のうに必死にしがみつくのがある。

「こら、離せ」

と叱ってもなかなか離さない。確か宮崎県の兵だ。そのうち、また一人泳いで来て雑のうにすがり付く。二人に下がられては、三人諸共お陀仏になってしまう。

「貴様達、早く飛び込んでいながら何事か」

げんこつで殴り付けたけれども、どうしても離さぬ。雑のうちの中には千人針・予備眼鏡二個・家族の写真・薬等が入っているのである。残念だが命には替えられぬ。肩から外して二人を残し、ひとりの戦友の筏に向かって泳いで行った。筏には八名位の戦友がつかまつたりしていた。ホッとする。

今までの事情を話すと、一同その労をねぎらつてくれた。気分が落ち着いたところで、疲れが出たのか気分が悪くなり、暫く四角なその救命筏の上に乗せてもらつて横になった。やがて気分も良くなり、皆と同様に筏のロープにつかまり、助けを待つことにした。

我々の四番船の最後だ。半分以上が海水にまだ見えている。船の断末魔だ。何とも言えない淋しいような、辛い悲しい重苦しい時が流れる。ふと、誰かが「海行

かばみずく屍……」の歌を唄いだした。思わず皆も唄いだした。「北光丸」との最期の別れだ。

沈没してしまふまでに、かなりの時間がかかったので乗船していた者ほとんどが助かったのである。

この頃、残りの三隻はそれぞれ離れて、状況を見ており命令待ちの状態だったのだろう。かなりの時間がたった頃、敵潜水艦が浮上してきた。これを我海軍駆潜艇二隻が、大砲を打ちながら追跡、敵潜水艦（三千トン級の大型艦）も駆潜艇目がけて発砲して応戦。我々の目前で海戦が始まったのだ。

「ヤレ、ヤレ、海軍頑張れ」

声を上げながら手を叩く者までいる。すかさず隊長が、「芝居や映画じゃないぞ。手を叩くな」

と叱る。やがて、潜水艦も潜って逃げたのか見えなくなり、駆潜艇の影も遠く小さくなった。

やがて、残りの三隻の船からボートが降ろされ、救命筏の兵を拾って本船へ運ぶ。ボートに上がるにも、船員の手添えがある。ボートに乗り込むと極度の疲労と、緊張感の解放からか、ボートに揺れながらつい

眠ってしまふ。すると、船員が眠っている兵隊の顔をいきなりひっぱたく。

「ここで眠ったら、あの世行きだぞ。そのまま死んでしまふんだ。それで眠らんように叩くんだ」

叩かれて、本当に有り難くて感謝した次第だった。

この日、五隻の輸送船団が二隻沈没され、助かった兵隊はそれぞれ残りの三隻の船に分乗して、船団を組み直し、ラバウルへ向けて航行する。全身濡れ風となつて船に上がり、（やれやれこれで何とか助かった。これも神仏のお加護ではないか）と有り難く想うのだった。船員から飲まして貰った砂糖水のおかげで、本当に元気が出てきた。

次の日、残りの三隻の内また一隻やられた。

我々の船にも雷撃があった。船首の方に向かって、一直線に魚雷の泡が走って行く。皆思わず（シマッタ。もうこれまでか）と死を予想した。ところが、この日は波が高くて荒れていた。船首の方が高波でぐーっと上がったかどうか、魚雷が通り抜けたのである。間一髪とはこんな事を指すのか、誠に幸運だった

と改めて神仏に感謝するのであった。船員一同も、「こんな事は全く、万にひとつも無い。兵隊さん方はこれから先も、きっと神仏のお加護があるでしょう」と喜んでくれた。我々は皆九死に一生を得たのである。雷撃後、どれ位時間がたったろうか。彼方前方に雲か飛行機か、だんだん時間が経つに従いはっきりしてきた。

「敵機ならいよいよおしまいだ」

話している内、誰かが

「日の丸だ！」

と叫ぶ。(やれやれ、良かった) 本当に喜んだ。

間もなく、船の上を超低空で飛び、翼で挨拶している。我々も大喜びで、両手を振ってこれに答える。

輸送船団の警護のため、基地ラバウル航空隊から飛んで来たのだ。その翌日も飛来して、ラバウル入港まで警護してくれた。敵潜水艦の来襲も無く、昭和十八年十一月三十日の昼過ぎ、ラバウル内港に入る。

誠に命がけの、長くて遠い航海は終わった。

暁七〇四八部隊陸上勤務第一〇六中隊補充要員とし

て、身ひとつ、濡れ鼠のまま入院したのである。

二、ラバウルの死線を越えて

昭和十八年十一月三十日正午過ぎ、目的地ラバウル到着、パラオ出港の時は、五隻の輸送船団の両側を駆潜艇が護衛して出港したのに、途中、敵の来襲により、僅かに二隻で入港とは残念なことであった。

我々は文字通り、身ひとつで濡れ鼠同然で上陸したのである。

内港周辺はさすがに第一線兵站地の感じ、椰子林は葉の付いた上の方は、ほとんどが空襲のため吹き飛んだとみえて、丸坊主になっている。また、あちらこちらの住宅暮舎と思える跡地も、真っ黒く焼け焦げて、パラオ島の感じとは全然違う。戦地の現実を目前に見て、思わず緊張するのだった。

百難をおかしてようやく到着の原隊(第一〇六中隊)は、ほとんどが宮崎県出身の僅かの生き残り部隊で、下士官や上等兵である。各地の激戦で多数の戦死者が出、その欠員補充として我々が召集された次第であった。我々の上陸を心から喜んで迎えてもらい、有

り難いことだった。その生き残り先任兵の話では、原隊は百五十名程度の要求に対して、内地での召集兵は五百名を越し、原隊へ到着までの輸送途中において、爆撃、撃沈を予想して、要員の約三倍以上も召集したわけで、我々は全くの犠牲弾同様であったのである。（当時、如何に我々の生命が軽く、安っぽいものであったかが想像される）。

原隊の生き残り兵の内、ニューギニアまで行き、ほとんどが戦死か病死でわずかに帰って来た兵隊の話では、ニューギニアでも最も高く、熱帯でも雪を頂くスタンデーの山々を越えて、ポートモレスビーの灯火がみえる所まで行きながら、後方からの食糧・弾薬・医薬品等、あらゆる物資補給が無く、ちょっとした倒木等を越えることができなかった。と如何に身体が弱り、人間の極限状態であったかが分かる。ニューギニアに行つたわが隊がほとんど全滅して、わずか数名の帰つた兵も、あまりの惨たらしい状況で、唇をかんで多くを話そうとはしなかった。

他方、ガダルカナルの最南方作戦も、同島飛行場や

滑走路が出来上がる頃、圧倒的な優勢な米軍の空爆・艦砲射撃の物凄い攻撃に撤退のやむなきに至り、夜間に潜水艦・駆逐艦等でラバウルへ引き上げた。そこでも食糧も無く、物資補給も出来ず、原隊へ僅かの兵が帰って来たが、ニューギニアからの引き揚げ兵同様、多くを話そうとはしなかった。如何に苦しい戦いであったか窺い知れる。

先に輸送途中、「北光丸」が敵潜水艦に撃沈される時、最期まで隊長の命令通り、軍の重要書類を沈没寸前の「北光丸」の船倉から担ぎ揚げ、病人のボートに移し、任務を遂行し、書類は無事ラバウルに着いたという関係から、私と熊本県出身の水流二人は、依然指揮班に残ることができ、外の班員は全部入れ替えた。た。

鹿児島第十八部隊の通信隊であった関係上、第七中隊網田隊長の電話係を命じられた。

海岸近くの中隊から、山手の方へ約五キロ位のところに、マタラタ本部（大隊本部）があつて、電話交換台もあり、ここから、各中隊・野戦倉庫・病院その他



に連絡が取れるようになっていた。

昭和十九年も一月下旬、通信訓練があり、電話訓練が主であった。その晩二十一時頃、マタラタ本部の交換台にいくら信号を送っても通ぜず、私は（九二式被覆線有線の断線に連いない）と考えて早急に隊長に報告、

「マタラタ本部まで有線を辿り、断線箇所を捜して修理すべく、本部まで調べに行つて確かめて参ります」と隊長は

「お前一人で大丈夫か」

「電話当番の自分の責任ですから、ひとりで参ります」

と行つて出掛けようとした時、隊長が、

「銃の安全装置は外して、いつでも発砲できるようにして置け、怪しい者がいたら討て。そして、本部へ着いたらすぐ隊長のところと連絡せよ。」

と命ぜられて、星明かりを頼りにひとり出発した。

九二の被覆線を辿りながら、灯火は野戦の關係上絶

対使用できないので、星明かりを頼りに入念に調べて行く。一時間位調べて行つても断線箇所がない。とにかく本部まで調べようと一心に辿る。

聞いた話によると、ラバウルの現地人や、敵のスパイ等が夜中に有線を切断するという。あたりにも細心の注意を払いながら進む。大きな椰子の葉が落ちて断線することもある。苦勞に苦勞を重ねながら調べても、断線箇所は不明であった。

マタラタ本部へ行き、班長に事の次第を話すと、何ということか、電話故障は本部交換台であつて、既に良く通じること。苦勞はしたがまずは安心。本部の班長や当番兵一同が私の苦勞を称賛してくれた。

早速隊長へ報告。時間は零時頃、隊長は連絡を待っていて、非常に喜んでくれた。

「明朝、明るくなつてから帰つて来い」

と、有り難いことだ。本部に泊めて貰い、朝食まで頂いて隊へ帰り、隊長へ早速ことの次第を話す。隊長も了承される。

「苦勞であつた。褒美として今日一日おまえに特

別休日を与える」

と有り難い仰せだ。自分の苦勞がむくわれたのだ。  
(立派な隊長を得た)ひとり心中大いに期するところがあつた。

昭和十九年二月に入ったところから、だんだん状況が悪くなり、毎日毎日空襲だつた。この頃は、定期的に十一時から十二時頃まで、敵機の飛来何百機という数であつた。P 38 ロッキード(双胴の梯子型)偵察攻撃機、非常に速度が速い。B 29 ボーイング(大型爆撃機・四発エンジン) B 25 ノースアメリカン(偵察攻撃機・双発エンジン) F 4 U(航空母艦の艦載機・攻撃機)、この機種が一番多く、一回の飛来機数が百機以上になり、最初は数えても数え切れない有様だつた。

百五十名位の中隊の員数の内、マラリアによる発熱患者その他の病人が二十名近くいて、それらを除いた中隊で農耕班(主に現地種のサツマイモ・野菜・ナスその他の野菜作り)、陣地構築班(海上からの敵襲に備えての塹壕掘り)、対空監視(二名、ラバウル中隊から仰ぐ丘の上にある)、防空壕掘班、本部使役班、中隊

炊事班等それぞれ空襲を避けながら作業を続けるのである。

内地の鹿児島の実夏といえども、戸外で作業していたら汗が出て、腕の汗が白く塩になるようなことは考えられないのであるが、午後三時四時頃になったら、腕に白い塩が付き、また、外に出したドラム缶の水が、熱いお湯になる程強い太陽光線の強さ。おまけに毎日毎日が空襲、P 38 ロッキードは絶えず飛んで来る油断も隙もあつたものではない。中隊の人員不足のため、私が宮崎県召集の新兵と、地区隊本部に使役として、約十日間出張して行つた。使役とはどんな仕事かと思つていたら、輸送班で弾薬等の受領の最も危険な仕事だ。南側の山手の野戦倉庫から、トラックで輸送するので。途中椰子林で空襲。トラック三台連ねて走ると砂ぼこりのため、飛行機からすぐに分かる。機銃掃射を受ける。椰子林の中を逃げ回って、敵機の遠退くまでが大変だつた。ようやく本部の壕に入れてホッとしたのであつた。地区隊本部の仕事をやっていたが、今度は作戦情報部の中村大尉とマタラチ周辺の地獄調

査だ。空襲を受けながら、約七日位調査した。途中芋畑の側溝に頭を突っ込み、空襲を逃れたこともあった。使役を終えて中隊へ帰って間も無く、今度は地区隊本部から、中国人収容所の監視兵として回され、その所在地ビタカリップには、名古屋師団から班長として、相岡伍長及び高道上等兵が回って来て待っており、私と三人連れ立って監視の任務についた。

中国人一般男子婦女子合わせて四十五名程であり、山の一個所に住居を持ち、戦前は椰子油製造や販売の職業を営んでいたが、日本軍の上陸によってここに収容されたということである。

我々三人に対し、幕舎や事務所作り等よく手伝ってくれた。中国人は皆親切でなかなか住みやすい所であった。パイヤ・野菜・バナナ・芋等よく持って来てくれて、仲良く生活が出来た。空襲もここだけは無いのが不思議だった。恐らくここがチャイナ（中国人集落）ということが、敵には分かっていたのかもしれない。

当然、私が近くの川で洗濯も、炊事の準備等もしな

ければならなかった。

約五か月位は無事平穩に過ぎていった。しかし、だんだんとラバウル周辺の状況も悪くなり、伝わる話は全て良い話ではなかった。

わが中国人収容所ビタカリップと、三キロ程隔てた山手の谷間に、マタラタ付近の十三か国の人種を、三百五十人程収容しているところがあり、ここの第六野戦憲兵隊（隊長は八師団長影花中将閣下と同期生の菊池大佐）マタラタ分隊長が長谷川少佐。ビタカリップへの分遣隊長は准尉で、班長・曹長・通訳外伍長・上等兵・兵隊要員（上等兵以下）合わせて八名で、その国籍の違ひ三百五十名を監視していた。

少し離れた所に、協会のガーデンが約十ヘクタールあり、その手入れや收穫するのを、監視するのが憲兵隊の仕事であった。

結局、我等中国人収容所の監視員三名は、地区隊本部令下から、第六野戦憲兵隊ビタカリップ分遣隊令下に入ったことになり、常時監視の三名が二名となり、私だけがタクバル農園その他の現地人（カナカ族）

の集落回りを、他の前任上等兵とすることになった。

ある時、(二十年に入ってから)隊長より、マタラタ周辺の地図の製作を命じられ、自分の得意とする図面作成にかかる。まだラバウル周辺の地図は見たこともないが、現在までの地獄調査・伝令等幹線道路が分かっていたので、時間をかけて入念に仕上げた。准尉から大変なお誉めの言葉を貰い、内心とても嬉しかった。

中国人収容所にいる時、鹿兒島原隊第七中隊網田隊長のおかげで、私は上等兵に進級していたので、マタラタ分遣隊では先任憲兵と一緒に、集落回りが多く、バナナ・鶏・卵等貰ったこともあった。

そのうち、戦況はますます悪くなるばかりで、あたかも真綿で首を締められるような状態であった。

昭和二十年八月十三日、点呼で私と小倉独立山砲より転属してきた原田上等兵と二人呼び出された。

「お前たちは、ワランゴイ出向を命ずる。明朝、マタラタ分隊長(長谷川少佐)の命令をうけてから行くように」

一瞬はっとして頭から冷水を掛けられたような感じだ。原田戦友とお互いに手を握り合った。

名古屋大阪方面からの上級士官で、結局、田舎出しでも転属してきた我々二人に、貧乏籤を押し付けたのだ。恨みをこめてにらみ付けてやった。二人共班長(大阪出身の軍曹)に気に入られず、彼等から見ると成績不良の我等の命は、飼犬よりも軽く見られていたのかも知れない。

この計画はワランゴイ河に近いここで考えられたらしいことも後で知ったことだった。河幅二百メートル位のワランゴイ河は、いつも赤土を溶かしたようなどぶ河で、ワニもあちこちにいるらしい。どこにも橋はなく、お互いに住人は対岸に住むことが禁じられ、転住遮断線になっている場所である。

既に敵のスパイが多数対岸に上陸しているらしく、現地人は銃をもって、椰子の木の上から監視をしているとのこと。

「今までに憲兵隊より何人も派遣されたけれども、ひとりとして帰って来た者はいない」

という話は何回となく聞かされていた。河向こうへの斥候は決死隊である。

マタラタ分隊では、隊長が

「お前達、誠に苦勞だが行つて頑張つて来い」と優しく別れの言葉を掛けてくれた。マタラタ分隊から現地人（黒人）の憲兵ボーイ三名、ワランゴイ河渡りの時、ワニのいない所を案内させるための現地人や、かねて、憲兵隊で教育しておいたボーイを連れ、装具・弾薬・手榴弾等揃えて、それぞれボーイに持たせ、自分達も完全武装でワランゴイ河に向かう。原田上等兵と

「生れた時別々でも、死ぬ時は一緒だよ」

と誓いあう。丁度マタラタ山の木を切り倒し、開墾でもするらしい所へ来た時、敵機が来襲。黒人ボーイは木のそばへしゃがみこんでいる。我々は切り残しの山かげで飛行機の通過を待った。ところが、敵機は機関銃掃射もせず、何かピラミタいな紙切れを落して行く。それをじっと眺めていたが、飛行機が去ると、ボーイにピラを拾わせた。数枚持つて来たのを見ると、最

初に大見出しで、

『ラバウル將兵諸氏、降伏せられよ』

『日本天皇ポツダム宣言を受諾せり』

「ラバウル將兵はすみやかに降伏せよ」この文章を見て、「これはおかしいぞ、敵の策略だ。これに惑わされるな」の合言葉でお互いに励まし合いながら、ワランゴイ目指して、さしていそぐでもなし、途中情け無いやら、（どうやらラバウルの敗戦も間近だ。どうせ生きて内地へ再び帰ることもないであろう）と思いがら歩いていると、原田上等兵も、聞いてみると「同じことを考えていたらしい。父母や妻子の事を考えながら、二人で話して歩いた。

気のせいか後ろの方で、誰かが呼んでいるような気がした。原田上等兵も同じく感じたと思えて、

「オーイ、スタップ」（P人語）と命令した。暫くすると顔見知りの憲兵ボーイが、一通の封書を手にしっかりと握つて一生懸命に走つて来る。一同びっくりして一体何事かと尋ねる。ボーイが

「ジャパン、オールソイジャン、カンベック」

「ビタカリップ分遣隊へ帰れ。あと、隊長のレターに書いてあるので分かる」

とのこと「さては、先の飛行機のピラ通るか。そういえば、今日は通る敵機も少なく、何となく静かだな」と二人で話し一応ビタカリップの隊へ帰ろうと、その憲兵ボーイと一同帰ることにした。

分遣隊も狐か狸につままれたような格好であったが、分隊からの連絡で結局、敗戦停戦の連絡だったというわけであった。

ここで原田上等兵と二人で心から喜び合い、長谷川少佐にも感謝し、最大の謝礼は天皇陛下に、心からお礼申し上げる気持ちだった。南陸相の「最後の一兵まで戦うべし」とつい一週間前宣言したのを、陛下の「戦いを止めよ」のご一言で戦争が終わったのだ。

一日遅れてワランゴイ河を渡っていたら、敗戦の連絡が届く筈もなく、恐らく二人もボーイも皆戦死だったかも知れない。生きて帰れて本当に有り難いことだった。

ラバウルやその外、南方諸島で戦死した戦友達には、

心から冥福をお祈りいたす次第です。合掌。

## 南方抑留レンバン島

大分県 羽田野 正義

昭和十八年七月二十日に臨時召集により西部第二十一部隊に応召。第一期検閲終了後十月二十六日動員下令、歩兵第二百二十三連隊第一大隊第二中隊に編入、十月二十九日編成完結。十月三十一日熊本屯営出発、十一月一日門司港出帆、乗船は「福洋丸」三千トン、船団九隻、臺北派遺静第一一九六二部隊吉瀬隊早坂隊、指揮小隊観測三番（野戦重砲測遠機手）が私の任務であった。二等兵。

夏衣袴が支給されているから南方に行くことはまらがないものと思う。

台湾高雄を過ぎて台風が接近。パシー海峡付近では台風に巻き込まれ大変だった。船中は暑さ厳しく汗は通路を流れる程。おまけにA型パラチフス、B型パラ